

# たくさんの「やさしさ」をありがとう

(2020.1.06)



昨年は、日本のみならず、世界中が自然災害に見舞われた。絹ふたばも、これで完璧だと保証された防水壁があったのに、浸水してしまった。このままでは温暖化による気候変動、異常気象は、さらに強くなるのが危惧される。被災後の復旧作業には、たくさんの人々が駆け付けてくれ、短期間で汚泥の処理、清掃、消毒を終わることができた。その後は、すぐに工事にかかる業者を確保することが難しく、業者が見つかって更にも更に大工等の技術者不足で、工事が進まないことに困った。そんな中で、絹幼稚園の保護者は、職員のことを心遣い、おいしいお弁当を作ってくれたり、ピアニカ等の購入資金の募金をしてくれたり、心温まる支援をしてくれた。その他、たくさんの人々が応援してくれた。

そんな中、年末に「赤ちゃんを触らないで」という若いママの投書が話題になった。私は赤ちゃんを見ると、つい触りたくなるだけでなく、抱っこさせてもらってしまう。子どもは社会の宝、みんなで声かけあって社会全体で育てていかなければならない。子育てはみんなが負担し、楽しまなければならない。子育てしやすい社会はその意識改革から始まる。

健康とは「心」と「身体」が健やかであることと言うが、今の時代「社会的関わり」も、もう一つの要素であると思う。人は人と関わってしか生きられない。人と関わるのが嫌になり、一人でいたいと思うことがあっても、人は誰かと関わっていなければ健全に生きられない。貧困と格差が拡大していく社会の中で、自暴自棄になり暴走する青年たちはみんな孤立している。

マザーテレサが道端で死んでいく浮浪者を見て、人間が最も辛いことは「孤独」だと、そういう人をホームに引き取り見守った。東北大震災の際に、被災者が最も辛いのは、時とともに被災地のことは自分には関係ない他人事として忘れられていく「無関心」だと言っていた。被災者の老人にインタビューした中国人記者の「今、何が欲しいですか？」の問いに「この苦しみに共感してくれる優しさだな」との答えに、記者が老人を抱きしめた姿がテレビに映った。

「優しい」とは人を憂えること、人の立場で考えること。人と関わって、環境も社会もみんなで作ることの大切さを、浸水をとおして感じた。絹幼稚園の保護者の皆様、職員のみならず、そして多くの人々の「やさしさ」にありがとう。今年はきっと良い年になります。



# アクティブ・ラーニング

(2020.2.03)



ラグビーワールドカップから、にわかにラグビーが大盛況である。日本の躍進の基はエディ・ジョーンズ前監督ではないかと思う。8時間も練習している日本のラグビーを見て、「何にもならないばかりか害になる。試合を想定して、何が必要か、どうトレーニングするか、自主的・主体的にじっくり考えて練習すれば、一時間半で十分だ」と言った。選手も「コーチに言われるまま、何時間もただ苦しいだけの練習をしていると、頭がボーとなって、ただやらされているだけで、何も考えなくなる。」と言っていた。

教育・保育でも、同じように以前からやっていたから、そのまま考えもせず、引き続いてやっていることがある。子どもに考えさせず、指示・命令と訓練が主流になっている。指示・命令どおり整然と行動していると、大人は、素晴らしい!と安心してしまう。昔、どこの園でもやっていた「トントン前」。先日、まだやっている園があったので驚いた。ピッピッと笛を吹くと、パブロフの条件反射の如く、トントン前ならえする。先生は楽だ。「前の人と、横の人とぶつからないように、間を空けてまっすぐに並びましょう」と言わない。子どもも先生も何も考えず、指示通りの行動をする方が楽かもしれないが、自発性・主体性は育たない。

小・中学校で、やっとアクティブ・ラーニングなどと言って、自ら課題を見つけ、自分で解決策を考え、実行していくという自主的・主体的な活動を重視するようになった。幼稚園でも、子どもが成長・発達するのは、指示・命令されたり、大人の顔色をうかがって行動する時ではなく、自分で考え、自分で決定し、その意思に従って行動し、失敗したり、他者と衝突したり、共感したりしながら、不都合を経験したり、くやしい思いをする時の方が心も頭も成長する。自分でやるのだから、意欲も忍耐力も育つ。大人は見守るだけでよい。必要な時にのみ、適切なタイミングで言葉がけをして教導する。

最も自発的・主体的・自主的な活動は「遊び」である。隊列を整えながら、合奏するなど、高度な表現活動は、見た目は素晴らしいが、かなり厳しく指導しなければならない。指示・命令も多くなる。幼稚園生活の多くの時間を費やす。遊ぶ時間は削られてしまう。目に見える出来栄だけを見ていると確かに素晴らしい。しかし、子ども達が奪われたものは目に見えないから厄介である。自由な活動の中で育つ意欲や忍耐力、人と関わる力などは見えない。



## 本来、子ども達はみんな自信家でやりたがりです。

(2020.3.02)



年少のA君が私の所へ来て、「僕はすごいよ。縄跳びで268回も跳べたんだ」と、自慢気に言いました。年少児で268回も跳べた子など未だかつていません。268まで数えられることさえ無理です。多分、年長さんが100回跳んだ、というのを聞いたのでしょう。そんなことはないと思いながら「そーか、すごいな、じゃ、跳んで見せてよ」と言うと、「いいかい、見ててよ」と言い、ニコニコしながらやりました。1回縄を回し、縄が地面に着くとそこをポーンと跳ぶ、と言うより跨ぎます。そして、もう1回、縄を回し縄をポーンと跨ぎます。「ねっ、上手でしょ！ちゃんと数えてよ。」と言いました。これを268回もつき合わされるのはカンベンしてもらいたかった。丁度、年長児がサッカーに誘いにきたので、「うん、上手だ！確かに飛び越えてる。」と言いながらその場を逃れた。

急の豪雨で園庭の側溝に落ち葉と土砂が入り、つまってしまい、水の流れが悪くなったので、側溝のフタを外し、スコップで土砂を取り除き始めると、いつものように砂場のスコップを持って応援(?)が駆けつけて来ました。本当は邪魔なのだが、そうは言えません。「手伝ってあげる」というのです。鉄のスコップでかき出すのですから、ぶつかったら危険です。「ありがとう、ぶつかると危ないから、離れたところで見ているか、他で遊んできて」と言っても、「大丈夫、大丈夫、手伝ってあげるよ」と聞かない。仕方なく、「少し離れたところでやってね。」と頼んだ。側溝の泥なので汚い。昔、仕方がなくやらせて保護者に抗議されたことがあった。泥んこになって、泥をまき散らした後、綺麗になった側溝に水を流したところ、大喜びで遊び始めた。そして翌日「うちの子に、ドブ掃除をさせないでください！しかも、ドブで遊ばせるなんて、非常識です」とお叱りをこうむりました。決してやらせたわけでも、頼んだわけでもないのに、本当は邪魔だったんだけど、どうしてもやりたがるので・・・とは言い訳せずに、ゴメンナサイと謝りました。一人が始めると、やりたがりが増えってきます。大人だけでやった方が、楽で、早いのですが、やりたがりが増え合ってやります。砂場のスコップを振り回すので、自分ばかりか、私にまで泥をかけます。砂場のスコップなので泥は少ししかすくえません。そして決まって「僕、すごいでしょ！」「いつでもお手伝いしてあげるからね」と言います。こんなに自分にも他人にも善意で、そして、意欲的にやっているのに、「本当は邪魔なんだけど」なんて言えません。ただ、同意するだけです。「うん、君はすごい！」と。だから、自信家でやりたがり、更に自尊感情を高め、意欲的になるのです。

おてっだいも ☆  
☆☆ しっかりね

## 不安な時代と夢と希望

(2020.4.03)



「不安」な時代だという。しかし、ほとんどの人が、今の生活に満足していると言う。特に、若者ほど現状を肯定している。環境悪化…気候変動、テロ、戦争への恐怖、財政悪化と経済恐慌の恐れ、格差、分断、いつ不幸に陥るか分からない世界である。今のままであって欲しいが、将来が不安であると言うのであろう。

フロイトは「欲求を満足させられないと、欲求は退行現象を起こす」と。そして、社会心理学のフロムは「人は成長への欲求と、退行への欲求の葛藤の中で生きている」と言う。困難な社会現象に直面すると、人間関係や世界観の視野が狭くなる。「未熟な状態」に戻るのが「退行」である。現代社会はまさに人間の幼児化である。今までの成長の流れから、退行の流れに歴史の逆行が始まったのかも知れない。人々は相互理解、寛容など成長に伴う困難から逃避して、自ら成熟を拒否してしまう。自分に対する不安が幼児化の原因だ。豊かで、今は幸福でも不安なので、退行してしまう。若者が「保守化」しているというが、本当は退行して幼児化しているのではないか。アメリカファーストも、難民排除もフェイクも暴言も、みんな幼児性の現れである。

私たちは、先人が大切にしてきた、譲り合うこと、利他の心、話し合うことの大切さを、子ども達に伝えていかなければならない。子ども達の時代に、汚れてどうしようもなくなった地球を残してはならない。少しずつできる範囲で、地球環境を改善していく努力を怠ってはならない。天文学的借金を子ども達に押し付け、今さえ良ければ、自分さえ良ければと、豊かな生活をして、不安な未来を作ってはならない。今の幸せを、ずーっと続けるために、少し不便になっても、少し貧しくなっても、今、難しいことに手を差し伸べることが大切である。

グローバル化は多様化である。子ども達の時代は他国や他の宗教の人々とも仲良く生活できるようになればいい。韓国も中国も同じ地球の仲間、仲良く生活しよう！米中の覇権争いは、子どものケンカ以下。軍備に莫大な税を使って、殺し合いの準備をしている。子ども達の目標となるような世界を語り合いたい。そして、不安のない夢や希望を語ることが、私たちの努めである。

## 春よ来い

(2020.5.01)



自粛、不要不急、三密の言葉が繰り返され、コロナウイルスの恐怖に押しつぶされそうな気分の毎日。それでも、園に行くと子ども達が、一齐に「園長先生、オハヨウ！」と駆けて来て、次々に飛びついてきます。子ども達は、元気に楽しそうに遊んでいますが、仲の良い子が休園していると、少し寂しそうで、活気がないようでした。おまけに、今年は暖冬だったのに、4月は雨と強風の日が多く、急に寒くなる日もありました。なんとなく心も冷たくなりました。

休日に近くを散歩していると、いつもは雑草としか見ていなかった草の中に、名も知らぬ沢山の小さな野の花が咲いていることに気づきました。そこで、ある晴れた日に、「春を見つけに行こう！」と、子ども達を誘いました。途中、アメンボをアミですくったり、虫を採ったりしながら、枝もたわわに、あでやかに咲き誇る八重桜をくぐり抜けると、広い野原に出ました。よく見るといろいろな種類の小さな野の花が、驚くほどありました。子ども達の中に、小さな植物博士がいて、たくさんの花の名前を知っていることにも驚きました。「これはヤハズエンドウというの、カラスエンドウとも言うの、昔はたべていたんだって。」タンポポが群生しているところでは「これはセイヨウタンポポと言って外来種なの、日本のタンポポは少なくなってるの。」彼の解説を聞いて、子ども達はすぐに覚えて「あっ、ホトケノザだ。」「ヒメオドリコソウだ。」と花の名を一致させていました。アカツメグサ、シロツメグサ、そしてシロツメグサがクローバー。」「ペンペン草がナツナ」その他、もっとたくさんの種類がありました。子ども達はすぐに覚えますが、私は何が何やら一致せず、覚えるのを諦めました。

野原にヒザをつき、図鑑を見ながら、一つ一つ花を見てみると、今まで雑草とひとからげにしてきた野の花が、みんな小さくてかわいらしくなってきました。いつも「雑草め！」と引き抜き捨てられていたのに、可憐な小さな青い花が、オオイヌフグリなどと名付けられ、可哀そうに……。帰り路、子ども達が競って私と手をつなごうとします。私が走ると子ども達も私に負けまいと走ります。私を追い抜いた子ども達と、青空を見上げ「幸せだなー」と思いました（どこかで聞いたことのあるセリフみたい）。希望という野の花が、心の中に咲きました。今は、誰もが辛い時です。しかし、どんなに辛い時でも、春は必ずやってきて、広い野原に人知れず小さな野の花が咲きます。





## 自粛

(2020.6.01)



外出自粛要請中に、散歩やジョギングなどは問題ないとの発表があったためか、いつものジョギングコースの遊歩道は、にわかジョガーで溢れ、公園も賑わい出した。あまりに、ハアハア走っている人が多くなったので、ジョギングは止めた。それでも、体を動かしたくなると、遊歩道を避け住宅街を走ることにした。人通りのない住宅街のところどころに「空き巣に注意！」の看板が立っている。素敵な家があるとキョロキョロしてしまうが、看板に急ぎ立てられるように、走る速度が上がる。

他人の目を気にしている自分に気づき、新聞の投稿を思い出した。「一日中、狭い家の中で、ストレスの溜まった子どもを連れて公園に行った夫が、早々に帰って来たので、どうしたのか尋ねたところ、公園で親子が遊んでいると、交番に通報があり、おまわりさんから注意されて帰って来たとのこと。」投稿者は「なんて社会だ！」と激怒していた。ある園でも匿名の電話があり「自粛要請があるのに、父母の会が活動をするのは非常識だ！市と県の教育委員会に通報するぞ！」「自粛してない園だと、SNSで拡散されるぞ！」とのこと。脅迫だ。父母の会は、園から独立した自主的な組織である。協力関係はあっても、自由に活動してもらっている。後日、教育委員会に聞いたところ「自粛中なのに、保育園児が遊んでいる。」「保育園の先生が、マスクをしていなかった。注意して欲しい」などと通報があるとのこと。元々「お上」とか「その筋」とか持ち出されると、余計に抵抗したくなる。大体、「散歩はいい」とか、口出されたくない。余計なお世話だ。

コロナウィルスを「戦争」と表現する政治家がいる。緊急事態下の国家の姿を露わにし、まるで戦時中の「大日本婦人会」の監視社会だ。自粛とは自らつつしむこと。他からとやかく言われることではない。一人一人の意識の問題。看護師や物流関係者などは、子どもを預けざるを得ない。園では散歩は手を繋がず、バラバラになって近くの野原や休校中の広々とした校庭で遊んでいる。3密を避け、手洗いを徹底している。(カミュの「ペスト」やスペイン風邪の「史上最悪のインフルエンザ」を読み、その恐ろしさと、3密を避けるしかないことが分かった。)先月の園便りで、「幸せだなー」と言ったが、「自粛警察」が横行する社会は「不幸せだなー」と思う。外出しない間、今まで読めなかった大著を読み、久しぶりに油絵も描いた。それなりに充実した時を過ごした。私達は、今まで競争ばかりで、じっくりと人生を楽しむ生活をしていなかった。対ウィルスについては100年前の教訓は生きていないが、この10年、20年の変化は異常だった。新しい生活様式より、新しい生き方、「ふたば」の様にゆったり、のんびり、楽しい生活を。自粛で空気が澄み、地球環境が改善されたという。地球にも、人にも優しい社会がきたら「幸せだなー」



## 実践知・体験知

(2020.7.01)



体験を通して、知を得ることが、幼児の成長にとって最も重要だ。自粛解除になったとたんに、ドッと登園が増えた。少々心配になったが、子ども達は広い園庭狭しとばかりに汗びっしょりになり、自由に遊んでいた。今度は熱中症が心配になる。2ヶ月ぶりに登園した子は、すっかり白くなっていた。新入園児の中には、「お母さん」と泣いている子もいた。（何かかフェンスにしがみついて、泣いているお母さんもいた）。見守っていると、門のところから少しずつクラスに近づいて来て、テラスに座って、時折、思い出したように泣く。しばらくすると、殆ど泣いている子はいなくなった。泣いても仕方がないと、徐々に自分に折り合いをつけていく。「折り合いをつけたな」と言う時に、そっと声をかけて、自律を援助する。自分をコントロールする頃合いまで、我慢して暖かく見守ることが大切だ。そして遊びに誘導し、遊び始める。「どうしたの?」「お母さんがいいの?」など、分かり切ったことを、次々と言って、子どもが自分と折り合いをつける時を潰してはいけない。泣くことも大切だ。自分の感情を発散して、思い切り泣く時期もあり、それを乗り越えて、自分をコントロールして、泣き止むことができるようになる。

ある森の幼稚園でのこと、雪遊びの後、焚火での昼食の際に、3歳児が近くの石の上に手袋を置いた。明らかに焦げてしまいそうなのに、スタッフは見ても見ぬふり、案の定焦げてしまった。男の子は泣いたが、スタッフは「この前は燃やしてしまったんです」と。用意された成功、整った成功より、自分からチャレンジし、失敗を重ねた方が、自分のものとなり、自信が育てられる。安心して失敗する環境を整え、失敗から得られる成長を保障している。

新型コロナウイルス感染症への対応を検討する政府の専門家会議の議事録が作成されていなかった。感染拡大を歴史的緊急事態に指定していながらである。カミュの「ペスト」や「歴史上最悪のインフルエンザ」でも、人々は禍が去ってしまうと「何もなかったように、全て忘れ去られた」と言っている。実証的データを示し、エビデンス（根拠）を踏まえた記録があって、後世の人々が対策を企てることができる。日本小児科学会や、アメリカの研究が休園について「感染防止効果は乏しい一方、子どもの心身に及ぼすデメリットが大きい」と報告があった。国内外の感染事例や研究を、科学的、実証的に分析した結果である。これも、やってみて分かったことであり、教訓として生かしていかなければならない「体験知」「実践知」である。



## 無題

(2020.9.01)



自粛期間中に、つくば市で在宅勤務の若いお父さんが、共働きのお母さんに代わって2人の子どもを小学校と保育園に送ることになった。小学生を送った後、在宅の仕事のことを考えていて、下の子を保育園に預けるのを忘れ、そのまま自宅に帰って仕事をしてしまった。夕方、姉を迎えに行く時に、車の中にいる妹に気付いたが、既に死亡していた。当日は猛暑日、お父さんも気の毒である。同じ日の朝刊に、在宅勤務になり、仕事量は増えたとの報告があった。

テレワーク、オンライン会議、長時間部屋に閉じこもり仕事をするのは、とても息苦しい。オフィス経費削減、通勤効率改善などと、良いことばかり挙げられ、新しい生活様式をと言うが、それで人間らしい生活ができるだろうか。申し訳ないが、子ども達とおいしい空気、豊かな自然の中で生活している人間にとって、家の中に一日中閉じ込められるのは、真っ平ごめんだ。人間はオンラインでは育たない。人間関係もオンラインでは築けない。絡み合って、取っ組み合って子は育つ、面と向かって話し合い、人間関係ができる。自宅と職場を分けることで、気持ちがりセットできる。家ではスウェットパンツでリラックスできるし、職場では仕事着、スーツで気持ちもシャキッとす。オンライン飲み会、オンライン会議、自宅でできるが、混沌としてメリハリがなくなる。

「新しい生活様式」などと言わなくとも、「うつらない、うつさない」ため、感染防止策を各自が守ること、3密を避け、マスク、消毒を徹底することだ。人とは2メートル以上離れる、消毒を！と一日中放送されると、非常に神経質になる人がでてくる。コロナ警察が現れる。遊んでいる時も、マスクを徹底しろ！絵本も何もかも消毒しろと言ってくる。そのうち、園庭の土まで消毒しろと言いつくすのではないかな。

新聞の投書欄にこんなことが載っていた。スーパーのレジの前で、間隔を空けるための線を、少し超えてしまったら、前のジイさんから「近づくな！」と怒鳴られた。同じようにレジに並んでいたら、前の女の子が片手でタオルを口に当て、もう一方の手でカゴを抱えながら、カバンの中のマスクを探していたので、予備に持っていたビニール入りのマスクを「どうぞ使って」と差し出したら断られた。遠慮しているのだと思い「私は余分にもっているから」と、もう一度勧めると「ビニールにウィルスがついているか分からないでしょう！」と大声で拒絶されたという。人はみんな毒だらけで近寄れなくなってしまふ。

子ども達は、私に濃厚接触してくる。私を見つけると、足にからみつき、体に飛びつき離れない。イスに座るとヒザの上に乗ってくる。もう一人が来ると、片方を空け両足に一人ずつ座る。座れない子は首にしがみつき、肩に乗り、私はアスレチックのように扱われる。逃げると足にしがみつき、ズボンを引っ張り、シャツの裾を引っ張る。止まると、「シュワッチ」とか「オリヤー」とか叫んで、私をサンドバックのように、パンチやキックをしてくる。

私は、友達が東京に多いが、行かない。子どもを守るため、人混みを避け、会いたい人にも会わず、行きたいところにも行かず、我慢している。みんなと一緒に、もう少し我慢して、秋晴れを待とう。歴史上、終息しない疫病禍はなかったのだから。



# コロナと子ども達

(2020.10.01)



コロナのお陰で、子ども達の生活を見直すきっかけになった。自然の中で遊ぶことが多くなり、自然に目を向け、いろいろな体験ができ、知識が増えた。外遊びが多くなり体力がついた。大人の関わりがなくなって、行事も子ども達が中心になった。

ほんの一例だが、夏祭りは、お店屋さんごっこの延長で行った。一人400円を持って、お買い物やゲームをする。先生たちがサポートして、年長児が店を運営する。客の呼び込みから、自作の立派なレジでしっかり計算し、お金の管理もする。中には、ヨーヨーや、ゲームでお金を使いすぎて、お昼に、焼きソバ、ソーセージを買えなくなってしまった子や、お金を払いたくない、タダでソーセージが欲しいと、お金をぎゅっと握りしめて頑張る年少児もいた。幼児教育の基本として、イマジネーション（想像力・計画性・予測）自己管理能力、自己抑制を育てることが重要である。自分の行動の結果を予測し、考え、自分で判断・決定し、その判断に従って行動し、その行動の結果は、決して人のせいにせず、自分で責任を負って、もう一度、次はもっとうまくやろうと考えることが、経験知となる。自分の行動の結果をイメージして、自己管理をしっかりできる子に育てることである。犯罪を犯す少年は、これができない。幼児期に育てられていない。何かが欲しいとなると、その行動の結果がどうなるか予測せず、欲しいから奪う（強盗）・・・短絡的でその結果は考えない。最悪の場合、福岡の事件のように、女子トイレに侵入して、人を殺して奪おうとする。

お昼に焼きソバを買うお金がなくなってしまった子は、まだ、計画性・予測力も育っていなかった。一つで十分なヨーヨーを、5つも持っていた。これからは、予測・計画性を持ってやらなければならないという貴重な苦い体験である。お金を握りしめ、レジの前で立ち尽くしていた子は、後から来た子が「ソーセージ頂戴」「二本で50円です」とのやり取りをじっと見ている、売買、お金と物との交換を理解し、「ソーセージ頂戴」とお金を払っていた。こんな時、大人が口出ししない方が、子ども達の体験にとって、ずっといいように思う。運動会についても、今までと違った姿が見られた。障害物競争では、真剣に競い合っている子もいれば、いかにも楽し気に、山をゆっくり滑り降りる子もいて、ビリになってもニコニコと楽しそうに、もっとやりたいと言う。リレーでも、風を切って走ることを楽しんでいようである。曲が流れると、年齢に関わらず、全園児が踊りだす。いつもとは違う運動会の姿である。

子どもは競わせなくても、競うことを楽しむ。そして、自由に自己発揮、自己充実することがもっと大切である。行事も、日々の生活でも、今、この子たちに何を育てたいか、どう育て欲しいのか、目的・ねらいをしっかり持って、保育していかなければならない。



## ボーッと生きている時間も大切である

(2020.11.01)



TV番組のチコちゃんが人気だ。ゲストに質問をして、答えられないと「ボーッと生てんじゃーないよ！」と額に青スジを立てて怒る様子と、ゲストの反応が面白いようだ。質問の内容は、答えられなくとも、どうでもいいものである。人はボーッと生きている時間が大切である。むしろ、充実した人生を送るためには、ボーッと生きている時間が必要だ。

打ち寄せる波と青く広がる海を眺めたり、流れる雲と山にじっくり対座するのが好きだ。子どもの頃、急な雨に、あわてふためいて走って行く人々を、玄関の前の踏み石に座って眺めているのが好きだった。幼稚園でも、軒の下のベンチに座って、雨に煙る林と園庭をたたく雨をボーッと眺めているのが好きだ。必ず子ども達が寄ってきて、「何してるの？」と尋ねる。「何もしてないよ。ただ、雨を見ているの」と答え、「一緒に見ていようよ」と言うと、しばらくただ黙って見て、黙って去って行く。何を感じただろう。

現代は、ますます忙しくなっている。忙しい、という言葉は好きではない。よく忙しそうですね？と言われる。失礼になるので「忙しいという言葉は好きではない」とは言えないが、「忙しそうに見られるのは残念です。忙しいとは心を亡くす、と書きますから」と言うと、謝られることがある。熱中して仕事・勉強・遊びをすることは大切なことだ。しかし、心を亡くす程、時間に追いかけられることは良くない。そういう時は、深く思考したり、創造的なヒラメキをしたりすることはできない。ボーッと生きている時の方が、感じたり、ヒラメイたりする。自然の中でゆったり過ごす中で、香りや味や光や音を感じる感動を体験することが、人生を豊かにする。

考えてみると、幼稚園も随分忙しくなった。小学校並みに朝からお帰りまでビッシリ時間割が組んである幼稚園がある。登園すると、黒板にその日の時間割が組んであり、すぐに1時間目の活動になり、次から次へと予定どおり行動しなければならない。全て集団行動でキチッと決められている。ボーッと生きている時間などない。幼児期は発達に差があり、個性が豊かである。それぞれが好きで、興味・関心があることにじっくり取り組んでいくことで、「不思議だな？ どうして？ 何故？ どうしよう・・・」と好奇心を膨らませていくことが大切である。それにはゆったりとした時間の流れの中で、やりたい事をとことんやらせることが大切である。この大切な時間の中で、ひとり一人の心の動き、発達をしっかりと見守るのは大切なことである。ビッシリ管理して、集団で行動させる方が、大人にとっては楽（らく）であるが、子どもには楽しくない。指示に従うだけで、主体性も育たない。しかし、一般的に保護者（大人）は、自発性・主体性のかけらもない整然と訓練・管理されたマーチングなどが大好きである。

## 筑波山の子ども達

(2020.12.01)



幼稚園の筑波登山の翌朝、門のところで登園してきた子ども達に「おはよー！」と声を掛けると、見向きもせず、うかない顔で、「オ・ハ・ヨ」と聞き取れないくらいの小さな声が返ってきた。「元気ないな、どうした。もっと元気にあいさつしてよ」と言うと、「昨日の疲れが抜けないんだよ」と言う。お母さんの真似をしたのだろうが、オイオイ、高貴光令者にいう言葉かよ、と絶句し、ガックリし、笑うしかなかった。

40年前には、筑波登山をする園はなかったが、登るのは体重移動だから、体の軽い子ども達にとっては、たやすいことだと思った。しかも、手を突く間隔が近いので、危険は少ない。(但し、反対に下りは手をつけないので、かなり危険である。)初めて登った時には、茶店の人達がびっくりしていたのを憶えている。ケーブルで来る園もあったが、足で登った幼稚園は初めてだったとのことだった。登山中に、小学生と一緒にになると、運動不足と体重オーバーで、へばった小学生の集団に道をふさがれてしまうので、1時間～1時間半で登れるところ2時間以上かかってしまう。最近は6時半ごろに園を出て、邪魔されないように1番乗りで登り始めるので、先頭集団は10時前には山頂に着く。お陰で10時半頃には全員が集まってお弁当になり、余った時間で男体山にも登っている。流石に男体山まで登っている幼稚園や小学校はない。

登る前に、筑波山をジッと見上げていた子が「誰がこんな山を作ったんだろう」とつぶやいた。すると、横にいた子が「神さまだよ。上に行くと神さまの家があるよ」と答えた。登り始めると、ビニールを持っている子がいた。「ビニール、どうするの?」と尋ねると「雲を取って帰るの」と言った。今年は快晴に恵まれ、雲は取れなかったが、先頭集団は快調に登った。子ども達は途中、少し広くなっているところで、ヤッホー、ヤッホー、を連発した。下山して来る人達が「みんな、スゴイね、元気ねー」と声をかけてくれた。すると、急に「ヤッホー、ヤッホー、うるさい!邪魔だ、どけ」と怒鳴られた。子ども達は、みんなに誉められていたのに、急に怒鳴られたので、みんなビクビクして黙ってしまった。いかにも偏屈そうなジイさん(オはつけない)だった。ジイさんが少し下りたところで、「あんなジイさんもいるよ。さっきよりもっと大きい声で、下から登ってくる友達に、ヤッホーと、励ましてやろうよ」と私も一緒に大きな声で「ヤッホー」と叫んだ。ジイさんにも届いたかな?それにしても、平日の筑波は年寄りが多くなった。ここも高令化かな。特に、ずっと昔、娘だった人が、今でも娘のように軽快に登っていた。女性活躍社会などと掛け声ばかりの日本、ジェンダーギャップ指数世界121位。この女性パワーを生かさない手はない。本園でも女の子は、強くてしっかりしている。この子たちの時代は、男女の差がない社会になって欲しい。

